

文教大学大学院言語文化研究科 博士学位論文審査結果

申請者氏名	王 唯斯	報告番号	甲第5号
学位の種類	博士（文学）	学位授与年月日	2020年9月16日
学位論文題目	日本語：中国における芥川文学の翻訳の系譜—翻訳論的アプローチをもとに— 英語：The Genealogy of Akutagawa Literature's Translation in China : A Study Based on a Translatological Approach		
審査委員	白井啓介（主査：文教大学教授）、鈴木健司（副査：文教大学教授）、蔣垂東（副査：文教大学教授）、芦田川祐子（副査：文教大学教授）、秦剛（副査：北京日本学研究中心教授）		

1. 論文内容の要旨

本研究は、五四新文化運動以降、2020年の現在に渉る、中国における日本文学の翻訳ストラテジーの変遷とその翻訳手法について、芥川龍之介の文学作品を対象として、通時的に考察したものである。

芥川龍之介（1892-1927）は、中国でも長期に渡り注目を集め、読み続けられる日本の近代作家の一人である。中国における日本文学の翻訳史という観点から見れば、芥川文学の翻訳は、中国新文学の生成発展と一体不離の関係にある。辛亥革命によって政治制度としての共和国は現出したが、それを支える思想も体制も旧態依然のままであった。これに対して、思想革命によって国民国家の理念とシステムを樹立することを企図したのが1910年代後半に展開された五四新文化運動だった。ごく一部の知識人層に独占されてきた文学や思想の表出を、中等教育程度の人間にも解放することが、この運動の眼目であった。だが、理論は唱えられるものの、実体がなかなか伴わなかった中、白話文（口語文体）による文学の先鞭を付けたのが魯迅の「狂人日記」であり、それは1918年のことだった。

芥川文学の最初の中国への翻訳紹介が、わずかにその3年後に行われたということから、その翻訳には重層的な役割が期待されていたことが窺える。五四新文化運動によって白話文が提起されたものの、1920年代初頭では、どのように白話文を書けば良いのか試行錯誤のまっただ中であつた。そのような中で示された魯迅訳の「鼻」と「羅生門」は、まさに白話文体で表記するための「実験場」でさえあつた。自国語の口語による文学表記の可能性を押し広げるために、外国文学の翻訳を援用して新たな局面を導く必要があつたことが知れる。そこで採られた翻訳手法は、日本語の表現法、接続法、修飾関係等を損なわず、できるだけそのまま訳す「直訳」法であつた。

これに対して、人民共和国期以降は、国家的事業として「普通話」（共通語）の定着化・普及が進められていた。これにより、現代中国語白話文体の表記手法は相当程度熟成を迎えており、この時期に翻訳された諸作品は、すでに「直訳」よりも現代中国語表記法に親和性のある翻訳手法がとられるようになっていった。すなわち、起点言語志向から目標言語志向へと転換していったのである。このような両時期にわたる芥川文学の中国語訳テキストを通覧比較検証することで、中国における翻訳ストラテジーの変遷を実証的に跡付けることが本研究の中核をなす。

本研究では、この変遷と推移を明らかにするため、序章を含めた8章からなる構成を採る。

序章（pp.1-10） 第1節研究の背景と目的 第2節先行研究 第3節研究の方法 第4節本論文の構成

第1章理論的枠組みと両時期の翻訳文学の位置づけ（pp.11-26） 第1節理論の枠組み 第2節両時期の翻訳文学の位置づけ

第2章 清末民初における翻訳活動の概観(pp.27-48) 第1節翻訳文学の幕開け 第2節梁啓超と豪傑訳 第3節中国古典文学に同化された外国文学 第4節清末民初に見られる翻訳法とその背後

第3章 民国期における芥川文学の翻訳 (pp.49-81) 第1節翻案から翻訳へ 第2節魯迅訳「鼻」と「羅生門」 第3節夏丐尊訳『支那遊記』 第4節湯鶴逸訳『芥川龍之介小説集』 第5節芥川の自殺後の翻訳ブーム 第6節翻訳と「国語」の改造

第4章 人民共和国期における芥川文学の翻訳 (pp.82-101) 第1節 1949-1979の空白の30年 第2節 1980年以降芥川文学翻訳の再開 第3節 21世紀以降の翻訳 第4節同化的ストラテジーへの回帰

第5章 作品論 その1 (pp.102-150) 第1節「鼻」の中国語訳について 第2節「羅生門」の中国語訳について 第3節「蜘蛛の糸」の中国語訳について

第6章 作品論その2 (pp.151-199) 第1節「南京の基督」の中国語訳について 第2節「河童」の中国語訳について 第3節「支那遊記」の中国語訳について

第7節 総論 (pp.200-215) 第1節民国期の翻訳ストラテジーについて 第2節人民共和国期の翻訳ストラテジーについて 第3節結論と今後の課題

参考文献 (pp.216-223) 付録 芥川龍之介の中国語訳単行本リスト (pp.224-229)

序章では、研究の背景と目的、研究の方法、本論文の構成について論述する。

第1章では、訳例分析の理論的枠組みとして Even-Zohar の多元システム理論と Venuti の異化と同化の翻訳ストラテジーについて概観する。そこから民国期と人民共和国期の両時期における翻訳文学の位置づけについて論述する。

第2章では、清末民初における梁啓超と林紓の訳業を中心に、五四新文化運動以前の翻訳事情を概略的に紹介する。その上で、この時代の翻訳者の多くが、なぜ翻案など「ダイジェスト」的訳出法を取ったのかについて考察する。

第3章では、民国期における芥川文学の翻訳事情と五四新文化運動以降、魯迅をはじめとする知識人らが逐語訳を提唱した原因について論じる。

第4章では、人民共和国期における芥川作品の翻訳事情を概略的に紹介する。特に、この時期の代表的翻訳者である林少華の「和臭不要論」に目標言語志向が顕著に見られることが指摘される。

第5章と第6章では、民国期と人民共和国期の両時期にわたって翻訳された作品に絞り、翻訳テキストについて具体的な比較対照を展開する。本研究の眼目というべき翻訳の対象分析であるが、これを比較対照するに当たって、①語彙（文化的差違を伴う語句、ものを数える語＝量詞）②連体修飾語（節）③修辭（叙述形式）を指標として、各作品の比較分析を行う。ここで対象とする作品は、「鼻」、「羅生門」、「蜘蛛の糸」、「南京の基督」、『河童』、『支那遊記』（中国遊記）など、翻訳論として特徴的な要因が顕著な作品に絞られる。この比較対照分析から、民国時期と人民共和国期における翻訳ストラテジーが起点言語重視から目標言語依存への明瞭な傾斜を示すことを明らかにする。特に、それは③修辭（叙述形式）の面で「四字格」（成語にまでは定着していない、四字による臨時的結合）の多用として顕著であるとし、「鼻」の翻訳で、原文が「知らない者はない」の箇所を魯迅が「是沒有一個不知道的」と「直訳」したのに対して、人民共和国の翻訳では、ほとんど「無人不曉」と「四字格」で訳される点などを挙げる。

第7章では、両時期の翻訳ストラテジーを総括的にまとめ、人民共和国における翻訳手法につき、その翻訳文体が日本文学の文体から遊離してあまりに「中国化」され過ぎる傾向も見受けられ、梁啓超や林紓の時代への先祖返りにも見えることに違和感を示す。その一方で、2000年代に入って進められつつある趙玉皎や施小煒らが企図する起点言語寄りの翻訳に期待を寄せる。

以上の考察により、本研究では、1920年代魯迅周作人により強く押し進められた「直訳」が、翻訳文体を通じて中国現代白話文学文体の改造、革新に大きく寄与したことを明らかにする。これに対して、中華人民共和国成立以来、全国的に推し進められた「普通話」の普及、浸透につれ、日本文学の翻訳についても、大きく「中国化」されていく足取りが芥川文学の翻訳からも顕著であることを、翻訳の実作品に基づき実証的に究明する。

2. 審査結果の要旨

中国における日本語・日本文学の翻訳では、翻訳技法が経験的に共有され教授されることが多かった。一部の翻訳家は、日本文学の意義や価値に着目して、それを中国に迅速に翻訳紹介できれば良しとし、またある翻訳家は、日本で評判の作品を、できるだけ中国人に分かりやすい文体で提供することを旨とする。だが、ここではどのように翻訳するか技法が語られるのみで、翻訳論としての方法論的考察や翻訳を統一的に分析する理論的探究は見出されない。

本研究は、こうした中国における翻訳界及び翻訳教育界における一種の経験主義に対して、新たな視点を提供することを企図した画期的な研究といえる。もちろん、先行研究として、芥川龍之介作品の翻訳を俎上に挙げ考察を行う試みが、従来皆無であったわけではない。翻訳が文学活動の重要な一環をなすものと見なし、魯迅周作人による『現代日本小説集』の本格的な再検討を試みた論考や、女性三人称代名詞の成立に対する魯迅の翻訳の関わりを究明した論述等が散見されるが、いずれも、翻訳論を射程に置いた意欲作ではあるが、中国での芥川受容の一環としての考察に収斂されがちであった。それは、本邦においては日本語中国語の翻訳を、両言語の個別特性に即しつつ翻訳論として展開することを可能とする条件が整っていなかったことによる。

これらに対して、本研究が一頭地を抜く点は、芥川作品翻訳の通覧によって、20世紀中国における日本文学の翻訳の戦略の変遷を明らかにしたところにある。これを達成するため、本研究ではまず翻訳論の主流である、Even-Zohar (Itamar, 1939-) の多元システム理論と Venuti (Lawrence, 1953-) の異化と同化の翻訳ストラテジーを中心軸とし、その上で当今の英語翻訳研究に見られる、いくつかの特徴的な指標を設けて行う分析方法を援用した。英語からの翻訳では、しばしば自叙体の訳出、関係代名詞の扱い、欧文脈の要素の扱い等を指標として検証されるが、日本語中国語間では関係代名詞などは存立しやうがないため、言語の特性に準拠して別途指標を立てねばならない。そこで本研究では、(1)語彙(文化的背景を持つ語彙、たとえば官職、機関名、あるいはものを数える助数詞等)、(2)連体修飾語(節)、(3)叙述文の配列等の指標を立てて、民国時期から人民共和国期にかけて翻訳された同一作品を通貫して比較対照する手法を採り入れた。起点言語は同一ながら、目標言語に翻訳された際に差違を生じさせる要因として検証するのに妥当な指標といえる。

日本語文体における連体修飾語(節)を翻訳する際には、異様に長い連体節を嫌う現代中国語文に適応させるため、主述文に分割することが、翻訳技法としてすでに定説化している。これを理論化するため、日本語学による分析アプローチも試みられているが、これは日本語翻訳の学習支援的指針とはなり得ても、翻訳論の理論的支柱となるまでには至っていないのが現状だ。

このような中で、本研究では民国時期と人民共和国期の両時期に翻訳が行われた作品に限定し、なおかつ複数の異なる翻訳テキストが存在する作品を分析対象とすることで、翻訳論としての理論的分析と起点言語が目標言語へと転換される際に生じる差違の要因を初めて明らかにした点が評価される。それは、目標言語の「規範化」に規正され、口語文体表現の定着浸透が大きく寄与する点であると論じる。中国における日本文学の翻訳にあつて、翻訳のストラテジーの変遷を理論的に統一的に解釈し得た功績は、高く評価できるところだ。

ただし、本研究では、目標言語である現代中国語の白話文(口語文体)に対する吟味が十分理論化されているとはいえ、通り一遍の「規範化」という一語で片付けてしまっている未熟さが残り、厳密さに欠けるとの指摘が審査委員からなされてもいる。現代中国語の共通語である「普通話」は、(1)北京語音を基礎音系とし、(2)北方方言を基礎語彙とし、(3)現代白話文の著作を語法規範とすると規定されており、魯迅等の創作文体も基準とされている。この点では、人民共和国期の翻訳文体のみが「規範化」の影響を受けるとする所説は、自己撞着をきたすものになりかねない。また、目標言語に翻訳された表現に対して軽々に評価を下している箇所が散見されるとの指摘も行われる。翻訳実践に従事する論者が、

他の翻訳家の文体を評定する際には、主観的判断を極力差し挟むべきではなく、この点での軽率さが散見するとの指摘も審査委員から提起されている。さらには、目標言語に訳された作品題名が、起点言語のままであったり、またその逆である場合もしばしば見受けられるとの指摘もある。

「規範化」については、中国語学への見識を高める必要があり、中国人だからといって中国の言語に精通するわけではないことを自覚して、改めて言語学的見地の獲得が求められる。

これらの不備、瑕疵については、しかしながら本研究が達成した 1920 年代以降の日本文学翻訳の方略の仕組み、ストラテジーの変遷とその由来を理論的に究明し得たという成果を損なうものではなく、今後のさらなる探究と考察の中で解明されるべき範疇の問題でもある。また個別の誤植、誤記、不統一等では、軽微な修正として処理されるべき誤りでもある。

本研究が、中華民国期から人民共和国期にかけての翻訳文体の変遷、芥川小説の翻訳文体の変遷から抽出した翻訳ストラテジーの生成発展の輪郭は、大筋において首肯されるものであり、画期的な論述であることに疑いを容れる余地はない。この点を評価した上で、次なる課題として浮かび上がる問題への指摘も行わざるを得ない。それは、小説の翻訳においてはここで明らかにされた筋道が認められるものの、文学作品の翻訳として大きな分野となる詩歌の領域での翻訳は、これと同様のストラテジーと認められるのかどうかという点である。日本文学においても、和歌や俳句等の詩歌では定型詩が、依然として主流であり続ける。他方、中国文学の長い歴史の中で主流の座を占め続けた定型詩は、文語文が本流であり、五四新文学運動の中で白話（口語）詩が生み出されたとはいうものの、詩歌の口語化は、小説の白話化より何十倍もの困難が伴っていた。こうした詩歌の分野で、日本の定型詩を中国のいかなる文体に訳すべきかについての理論的究明が求められるはずなのだ。現在でも、俳句の翻訳型として、あるいはそこから派生した新たな中国詩の領域として漢俳が一定の地歩を占めているが、これを翻訳論としてどのように位置付けるかについて、今後の考究が望まれる。

もちろん、これは本研究が小説の翻訳について精緻な成果を示し得たゆえに、さらにその次を期待する、いわば望蜀の期待であることはいままでもない。

2020 年 8 月 28 日に行った口述試験では、本研究について著者に説明を求めた上で関連事項について質疑応答を行った。著者は、十分説得力ある説明と答弁を行い、本研究の価値と意義を存分に示した。これにより、口述試験は優秀な成績で合格と認めた。

以上の審査の結果、本審査委員会としては、本研究が博士の学位に値する価値ある研究であると判定した。

なお、本研究の論文自体の日本語表現力と口述試験における答弁から、著者王唯斯が十分な外国語（日本語）能力があると認定した。